

## 巻頭言

## 近未来への希望の在処

黍稷農季人

Preface: The Presence of Hopes for our near Future

Kibikibi Nonkijin

春がもう来ているような青空の下を毎朝散歩している。人生でこれほど穏やかな時間はいまだかつてなかった。社会的な義務を果たし終えて、責任を解かれ、残り少ない余生を愉しむことは個人的にはとても幸せなことである。それでも老人の時間感覚では、1 週間が 1 日のように、1 週間が 1 カ月であるかのように、超特急で過ぎ去って行くようだ。

個人的には平安な日々であるが、現代の日常の状況はひどく危機的である。非日常でも戦争、内戦が止むことは。日々、絶望的なニュースばかりが流されている。まれにささやかな幸せが深い人生哲学を持って語られることはある。今しばらく生きているうちに、若い人々に、何とか希望の途を提示してみたいと考えた。老人が社会的責任を果たし、高い誇を持ちながら平穏な暮らしがあることを示したい。もともと現世における欲はあまりない。年寄りが元気でなければ、若者は未来を希望として見るができない。

多くの事象を経験して、人生のすべてが心に帰着することに気付いた。岩田慶治『人間・遊び・自然』(1986)、S. ミズン『心の先史時代』(1996)、M. スタウト『良心をもたない人たち』(2005) などから大きな啓示を受けた。心という捉え様もない浮動体の構造と機能を整理することができた。知能指数 IQ は精神年齢÷生活年齢×100 で算出される。学力の程度を示すものではなく、認知能力や思考力を総合的に評価する指標である。だが、本当の知能の高さや質は心の構造と機能をつなぐ認知流動性による統合と邪心の自律的制御によると考えるに至った。

日本や世界の人間たちが幸せになるには、まずは根底から心を再生することである。このためには、週末だけでも、美しくも厳しい自然の中で過ごす(博物的知能)。生活技術を身に付け、生きるための仕事の技を磨く(技術的知能)。市民活動に参加する(社会的知能)。ミズンの言うところの一般知能(認知流動性)、情報機器・生成 AI (人工知能) に依存し過ぎないで、生きている言語の使用を自覚したい。

そこで閃いたのは、再生 NIn (自然知能) を鍛錬し、自己家畜化に抗うことである。自分の自由意思で、家族のために働くことは楽しい。産業により給料を多くもらうことは、自由を切り売りすることでもある。仕事と職業は違う。生業と産業は異なる。80 億の人間が食を充たすには産業は必要であるが、生きるための生業はとても大事である。家族とともに生きる楽しみや安全な暮らしを保障しておかねばならない。特に、食料については、1993 年の冷害、2011 年の地震・津波・原子力発電所メルトダウンの経験からして、非常事態に備えて 3 ヶ月分ほどは備蓄する必要がある。くわえて、ささやかでも家庭菜園で野菜を作りたい。花壇の美しい草花も、暮らしの楽しみである。地域の人々との共感があれば、社会的な安全性も高まる。心の構造と機能を発育することが、自由、平等、博愛の社会を創り直す、再生する根底的な営みである。邪心を制御できるように、もっと美しい自然、アート、音楽、詩歌、文芸を暮らしに取り入れ、楽しみを増やそう。